

坂口安吾

白痴

白

痴

その家には人間と豚と犬と鶏と家鴨あひるが住んでいたが、まったく、住む建物も各々の食物もほとんど変っていないやしない。物置のようなひん曲った建物があって、階下には主人夫婦、天井裏には母と娘が間借りしていて、この娘は相手の分らぬ子供を孕はらんでいる。

伊沢いざわの借りている一室は母屋から分離ぶんりした小屋で、こは昔この家の肺病の息子むすこがねていたそうだが、肺病の豚にも贅沢ぜいたくすぎる小屋ではない。それでも押入おしいれと便所と

戸棚とだながついていた。

主人夫婦は仕立屋したてやで町内のお針の先生などもやり（それ故肺病ゆえの息子を別の小屋へ入れたのだ）町会の役員などもやっている。間借りの娘は元来町会の事務員だったが、町会事務所に寝泊りねとましていて町会長と仕立屋を除いた他の役員の全部の者（十数人）と公平に関係を結んだ。そうで、そのうちの誰かだれの種を宿したわけだ。そこで町会の役員共が醸金きよきんしてこの屋根裏で子供の始末をつけさせようというのだが、世間は無駄むだがないもので、役員の一人に豆腐屋とうふがいて、この男だけ娘が妊娠にんしんしてこの屋根

裏にひそんだ後も通ってきて、結局娘はこの男の妾めかけのようにきまつてしまった。他の役員共はこれが分るとさつそく醵金をやめてしまい、この分れ目の一ヶ月分の生活費は豆腐屋が負担すべきだと主張して、支払しはらいに応じない八百屋やおやと時計屋と地主と何屋だか七八人あり（一人当り金五円）娘は今に至るまで地団駄じだんだふんでいる。

この娘は大きな口と大きな二つの眼の玉をつけていて、そのくせひどく瘦やせこけていた。家鴨あひるを嫌きらって、鶏にだけ食物の残りをやろうとするのだが、家鴨が横からまきあげるので、毎日腹を立てて家鴨を追っかけている。

大きな腹と尻しりを前後に突きだして奇妙きみょうな直立の姿勢で走るかつこう恰好が家鴨か鴨に似ているのであつた。

この路地の出口に煙草屋たばこがあつて、五十五という婆ばあさんが白粉おしろいつけて住んでおり、七人目とか八人目とかの情夫を追いだして、その代りを中年の坊主ぼうずにしようかやはり中年の何屋だかにしようかと煩悶はんもん中の由よしであり、若い男が裏口から煙草を買いに行くいくと幾つか売ってくれる由で（但し闇値やみね）先生（伊沢のこと）も裏口から行ってごらんなさいと仕立屋が言うのだが、あいにく伊沢は勤め先で特配があるので婆さんの世話にならずにすんでい

た。

ところがその筋向いの米の配給所の裏手に小金を握つた未亡人が住んでいて、兄（職工）と妹と二人の子供があるのだが、この真実の兄妹が夫婦の関係を結んでいる。けれども未亡人は結局その方が安上りだと黙認しているうちに、兄の方に女ができた。そこで妹の方をかたづけする必要があつて親戚に当る五十とか六十とかの老人のところへ嫁入りといふことになり、妹が猫イラズを飲んだ。飲んでおいて仕立屋（伊沢の下宿）へお稽古にきて苦しみはじめ、結局死んでしまったが、そのとき町内の医者

が心臓麻痺しんぞうまひの診断書しんだんしよをくれて話はそのまま消えてしまった。え？ どの医者いしゃがそんな便利な診断書しんだんしよをくれるんですか、と伊沢が仰天おぼろけして訊ねると、仕立屋の方が呆気あっけにとられた面持おももちで、なんですか、よそじゃ、そうじゃないんですか、と訊きいた。

このへんは安アパートが林立し、それらの部屋の何分の一かは妾いんばいと淫売いんばいが住んでいる。それらの女達には子供がなく、また、おのおのの部屋を綺麗きれいにするという共通の性質をもっているのです、そのために管理人に喜ばれて、その私生活の乱脈さ背徳性などは問題になったことが一

度もない。アパートの半数以上は軍需工場の寮りょうとなり、
 そこにも女子挺身隊ていしんたいの集団が住んでいて、何課の誰さん
 の愛人だの課長殿の戦時夫人（というのはつまり本物の
 夫人は疎開中そかいということだ）だの重役の二号だの会社を
 休んで月給だけ貰もらっている妊娠中の挺身隊だのがいるの
 である。中に一人五百円の妾（というのが一戸を構えてい
 て羨望せんぼうの的であつた。人殺しが商売（という
 満洲浪人まんしゅうろうにん（この妹は仕立屋の弟子でし）の隣となりは指圧の先生
 で、その隣は仕立屋銀次の流れをくむその道の達人だと
 いうことであり、その裏に海軍少尉しょういがいるのだが、毎日

魚を食い珈琲コーヒーをのみ缶詰かんづめをあけ酒を飲み、このあたりは一尺掘ほると水がでるので、防空壕ぼうくうこうの作りようもないというのに、少尉だけはセメントを用いて自宅よりも立派な防空壕をもっていた。また、伊沢が通勤に通る道筋の百貨店（木造二階建）は戦争で商品がなく休業中だが、二階では連日賭場とばが開帳されており、その顔役は幾つかの国民酒場を占領せんりょうして行列の人民共を睨にらみつけて連日泥酔でいすいしていた。

伊沢は大学を卒業すると新聞記者になり、つづいて文化映画の演出家（まだ見習いで単独演出したことはない）

になつた男で、二十七の年齢ねんれいにくらべれば裏側の人生に
いくらか知識はあるはずで、政治家、軍人、実業家、芸
人などの内幕に多少の消息は心得ていたが、場末の小工
場とアパートにとりかこまれた商店街の生態がこんなも
のだとは想像もしていなかつた。戦争以来人心が荒すさんだ
せいだろうと訊いてみると、いえ、なんですよ、このへ
んじゃ、先せんからこんなものでしたねえ、と仕立屋は哲てつ学がく者しゃ
のような面持で静かに答えるのであつた。

けれども最大の人物は伊沢の隣人りんじんであつた。

この隣人は氣違あやいまだつた。相当の資産があり、わざわ

ざ路地のどん底を選んで家を建てたのも気違いの心づか
いで、泥棒どろぼうないし無用の者の侵入しんにゆうを極度に嫌った結果
だろうと思われる。なぜなら、路地のどん底に辿たどりつき
この家の門をくぐって見廻みまわすけれども戸口というものが
ないからで、見渡みわたす限り格子こうしのはまった窓ばかり、この
家の玄関げんかんは門と正反対の裏側にあつて、要するにいつペ
んグルリと建物を廻った上でないと辿りつくことができ
ない。無用の侵入者は匙さじを投げて引下る仕組であり、な
いしは玄関を探してうろつくうちに何者かの侵入を見破
って警戒管制に入るといふ仕組でもあつて、隣人は浮世うきよ

の俗物どもを好んでいないのだ。この家は相当間数のある二階建であつたが、内部の仕掛しかけについては物知りの仕立屋も多く知らなかつた。

氣違いは三十前後で、母親があり、二十五六の女房にようぼうがあつた。母親だけは正氣の人間の部類に属しているはずだという話であつたが、強度のヒステリイで、配給に不服があると跣足はだしで町会へ乗込のりこんでくる町内唯一ゆいいつの女傑じょけつであり、氣違いの女房は白痴であつた。ある幸多き年のこと、氣違いが発心ほっしんして白装束しろしようぞくに身をかため四国遍路へんろに旅立つたが、そのとき四国のどこかしらで白痴の女と

意気投合し、遍路みやげに女房をつれて戻^{もど}ってきた。気
 違いは風采堂^{ふうさい}々たる好男子であり、白痴の女房はこれも
 しかるべき家柄^{いえがら}のしかるべき娘のような品の良さで、眼
 の細細とうつとうしい、瓜実顔^{うりざねがお}の古風の人形か能面のよ
 うな美しい顔立ちで、二人並^{なら}べて眺めただけでは、美男
 美女、それも相当教養深遠な好^{こういっつい}一対としか見受けられな
 い。気違いは度の強い近眼鏡をかけ、常に万巻の読書に疲^{つか}
 れたような憂^{うれ}わしげな顔をしていた。

ある日この路地で防空演習があつてオカミさん達が
 活躍^{かつやく}していると、着流し姿でゲタゲタ笑いながら見物し

ていたのがこの男で、そのうちにわかたに防空服装ふくそうに着かえて現れて一人のバケツをひったくったかと思うと、エイとか、ヤーとか、ホーホーという数種類の奇妙な声をかけて水を汲くみ水を投げ、梯子はしごをかけて塀へいに登り、屋根の上から号令をかけ、やがて一場の演説（訓辞）を始めた。伊沢はこのときに至って始めて気違いであることに気付いたので、この隣人は時々垣根かきねから侵入してきて仕立屋の豚小屋で残飯のバケツをぶちまけついでに家鴨えさに石をぶつけ、全然何食わぬ顔をして鶏えさに餌えさをやりながら突然とつぜん蹴けとばしたりするのであったが、相当の人物と考え

ていたので、静かに黙礼などを取交とりかわしていたのであった。

だが、氣違いと常人とどこが違っているというのだ。

違っているといえは、氣違の方が常人よりも本質的に
 慎つつしみ深いぐらいのもので、氣違いは笑いたい時にゲタ
 ゲタ笑い、演説したい時に演説をやり、家鴨に石をぶつ
 けたり、二時間ぐらい豚の顔や尻を突つおそいていたりする。
 けれども彼等は本質的にはるかに人目を怖おそれており、私
 生活の主要な部分は特別細心の注意を払はらって他人から
 絶縁ぜつえんしようふしんと腐心ふしんしている。門からグルリと一廻りひとまわして
 玄関をつけたのもそのためであり、彼等の私生活は概がいし

て物音がすくなく、他に對して無用なる饒舌じょうぜつに乏とほしく、
思索しさを的なものであつた。路地の片側はアパートで伊沢の
小屋にのしかかるように年中水の流れる音と女房どもの
下品な声が溢あふれており、姉妹の淫売が住んでいて、姉に
客のある夜は妹が廊下ろうかを歩きつづけており妹に客のある
時は姉が深夜の廊下を歩いている。氣違いがゲタゲタ笑
うというだけで人々は別の人種だと思つていた。

白痴の女房は特別静かでおとなしかつた。何かおどお
どと口の中で言うだけで、その言葉は良くききとれず、
言葉のききとれる時でも意味がハッキリしなかつた。料

理も、米を炊くことも知らず、やらせれば出来るかも知れないが、へまをやって怒られるとおどおどしてますますへまをやるばかり、配給物をとりに行っても自身では何もできず、ただ立っているというだけで、みんな近所の者がしてくれるのだ。気違いの女房ですもの白痴でも当然、その上の慾を言っではいけませんまいと人々が言うが、母親は大の不服で、女が御飯ぐらい炊けなくって、と怒っている。それでも常はたしなみのある品の良い婆さんなのだが、何がさて一方ならぬヒステリイで、狂い出すと気違い以上に獰猛で三人の気違いのうち婆さんの

叫喚きょうかんが頭づぬけて騒さわがしく病的だつた。白痴おびの女は怯おびえてしまつて、何事もない平和な日々ですら常におどおどし、人の蹙音あしおとにもギクリとして、伊沢がヤアと挨拶あいさつするとかえつてボンヤリして立ちすくむのであつた。

白痴の女も時々豚小屋へやつてきた。氣違ひの方は我家のごとくに堂々と侵入してきて家鴨に石をぶつけたり豚の頬ほつぺたを突き廻したりしているのだが、白痴の女は音もなく影かげのごとくに逃にげこんできて豚小屋の蔭かげに息をひそめているのであつた。いわばここは彼女の待避所たいひじよで、そういう時には大概隣家たいがいでオサヨさんオサヨさんと

よぶ婆さんの鳥類的な叫びさけが起り、そのたびに白痴の身体はすくんだり傾かたむいたり反響はんきようを起し、仕方なく動き出すには虫の抵抗ていこうの動きのような長い反復があるのであつた。

新聞記者だの文化映画の演出家などは賤業せんぎよう中の賤業であつた。彼等の心得ているのは時代の流行ということだけで、動く時間に乗遅のりおくれまいとすることだけが生活であり、自我の追求、個性や独創というものはこの世界には存在しない。彼等の日常の会話の中には会社員だの官吏かんりだの学校の教師に比べて自我だの人間だの個性だの

独創だのという言葉が氾濫はんらんしすぎているのであったが、
 それは言葉の上だけの存在であり、有金をはたいて女を
 口説くどいて宿醉ふつかよひの苦痛が人間の悩みなやだと云いうような
 馬鹿馬鹿ばかばかしいものなのだった。ああ日の丸の感激かんげきだの、
 兵隊さんよ有難ありがとう、思わず目頭が熱くなったり、ズドズ
 ドズドは爆撃ばくげきの音、無我夢中むがむちゆうで地上に伏ふし、パンパンパ
 ンは機銃きじゆうの音、およそ精神の高さもなければ一行の実感
 すらもない架空かくうの文章に憂身うきみをやつし、映画をつくり、
 戦争の表現とはそういうものだと思ひこんでいる。また
 ある者は軍部の検閲けんえつで書きようがないと言うけれども、

他に真実の文章の心当りがあるわけではなく、文章自体の
真実や実感じつかんは検閲などには関係のない存在だ。要するに
いかなる時代にもこの連中には内容がなく空虚くうきよな自我が
あるだけだ。流行次第しだいで右から左へどうにでもなり、通
俗小説の表現などからお手本を学んで時代の表現だと思
いこんでいる。事実時代というものはただそれだけの
浅薄せんぱくぐれつ愚劣なものでもあり、日本二千年の歴史を覆くつがえすこ
の戦争と敗北が果して人間の真実に何の関係があつたで
あろうか。最も内省きやくの稀薄な意志と衆愚もうどうの妄動もうどうだけによ
つて一国の運命が動いている。部長だの社長の前で個性

だの独創だのと言い出すと顔をそむけて馬鹿な奴だとい
う言外の表示を見せて、兵隊さんよ有難う、ああ日の丸
の感激、思わず目頭が熱くなり、OK、新聞記者とはそ
れだけで、事実、時代そのものがそれだけだ。

師団長閣下かっかの訓辞を三分間もかかって長々と写す必要
がありませんか、職工達の毎朝のノリトのような変テコな
唄うたを一から十まで写す必要があるのですか、と訊いてみ
ると、部長はプイと顔をそむけて舌打ちしてやにわに
振向ふりむくと貴重品の煙草をグシヤリ灰皿はいびらへ押おしつぶして睨にら
みつけて、おい、怒濤どとうの時代に美が何物だい、芸術は無

力だ！ ニュースだけが真実なんだ！ と呶鳴どなるのであ
 った。演出家どもは演出家どもで、企画部員は企画部員
 で、徒党を組み、徳川時代の長脇差ながわきざしと同じような情誼じょうぎの
 世界をつくりだし義理人情で才能を処理して、会社員よ
 りも会社員的な順番制度をつくっている。それによつて
 各自の凡庸ぼんようさを擁護ようごし、芸術の個性と天才による争覇そうはを
 罪惡視し組合違反いはんと心得て、相互扶助そうごふじよの精神による才能
 の貧困の救済組織を完備していた。内にあつては才能の
 貧困の救済組織であるけれども外に出でてはアルコール
 の獲得組織かくとくで、この徒党は国民酒場を占領し三四本ずつ

ビールを飲み酔よつ払ばらって芸術を論じている。彼等の帽子ぼうし
 や長ちようはつ髪かみやネクタイや上着ブルースは芸術家であつたが、彼等の
 魂たましいや根こんじよう性は会社員よりも会社員的であつた。伊沢は
 芸術の独創を信じ、個性の独自性を諦あきらめることができ
 ないので、義理人情の制度の中で安息することができな
 いばかりか、その凡庸ひれつさと低俗卑劣な魂たましいを憎にくまずにいら
 れなかつた。彼は徒党のの除のけ者となり、挨拶しても返事
 もされず、中には睨にらむ者もある。思いきつて社長室へ乗
 込んで、戦争と芸術性の貧困とに理論上の必然性があり
 ますか。それとも軍部の意思ですか、ただ現実を写すだ

けならカメラと指が二三本あるだけで沢山ですよ。いかなるアングルによつてこれを裁断し芸術に構成するかという特別な使命のために我々芸術家の存在が——社長は途中とちゆうに顔をそむけて苦りきつて煙草をふかし、お前はなぜ会社をやめないのか、徴用ちようようが怖こわいからか、という顔附かおつきで苦笑をはじめ、会社の企画きかく通り世間なみの仕事に精をだすだけで、それで月給が貰えるならよけいなことを考えるな、生意気すぎるといふ顔附になり、一言も返事せず、帰れといふ身振りみぶを示すのであつた。賤業中の賤業でなくて何物であろうか。ひと思いに兵隊にとられ、

考える苦しきから救われるなら、弾丸も飢餓もむしろ太平樂のようにすら思われる時があるほどだった。

伊沢の会社では「ラバウルを陥すな」とか「飛行機をラバウルへ！」とか企画をたてコンテを作っているうちに米軍はもうラバウルを通りこしてサイパンに上陸していた。「サイパン決戦！」企画会議も終らぬうちにサイパン玉^{ぎょくさい}砕、そのサイパンから米機が頭上にとびはじめている。「焼夷弾^{しょういだん}の消し方」「空の体当り」「ジャガ芋^{いも}の作り方」「一機も生きて返すまじ」「節電と飛行機」不思議な情熱であった。底知れぬ^{たいくつ}退屈を植えつける奇妙な

映画が次々と作られ、生フィルムは欠乏し、動くカメラは少なくなり、芸術家達の情熱は白熱的に狂躁し「神風特攻隊」「本土決戦」「ああ桜は散りぬ」何ものかに憑かれたごとく彼等の詩情は興奮している。そして蒼ざめた紙のごとく退屈無限の映画がつくられ、明日の東京は廃墟はいきよになろうとしていた。

伊沢の情熱は死んでいた。朝目がさめる。今日も会社へ行くのかと思うと睡ねむくなり、うとうとすると警戒警報がなりひびき、起き上りゲートルをまき煙草を一本ぬきだして火をつける。ああ会社を休むとこの煙草がなくな

るのだな、と考えるのであった。

ある晩、おそくなり、ようやく終電にとりつくことのできた伊沢は、すでに私線がなかったので、相当の夜道を歩いて我家へ戻ってきた。あかりをつけると奇妙に万年床まんねんどこの姿が見えず、留守中誰かが掃除そうじをしたということも、誰かが這入はいったことすらも例がないので訝いぶかりながら押入をあけると、積み重ねた蒲団ふとんの横に白痴の女がかくれていた。不安の眼で伊沢の顔色をうかがい蒲団の間へ顔をもぐらしてしまっただが、伊沢の怒らぬことを知ると、安堵あんどのために親しさが溢あふれ、呆あきれるぐらい落着おちつい

てしまった。口の中でブツブツと呟くようにしか物を
言わず、その呟きもこっちの訊ねることと何の関係もな
いことをああ言いました。こう言い自分自身の思いつめたこ
とだけをそれも至極漠然と要約して断片的に言い綴って
いる。伊沢は問わずに事情をさとり、多分叱られて思い
余って逃げこんで来たのだらうと思ったから、無益な怯
えをなるべく与えぬ配慮によって質問を省略し、いつご
ろどこから這入ってきたかということだけを訊ねると、
女は訳の分らぬことをあれこれブツブツ言ったあげく、
片腕をまくらあげて、その一ヶ所をなでて（そこにはカ

スリ傷がついていた)、私、痛い、とか、今も痛むの、とか、さつきも痛かったの、とか、色々時間をこまかく区切っている、ともかく夜になってから窓から這入ったことが分った。跣足はだしで外を歩きまわって這入ったから部屋を泥どろでよごした、ごめんなさいね、という意味も言ったけれども、あれこれ無数の袋小路ふくろこうじをうろつき廻る眩きの中から意味をまとめて判断するので、ごめんなさいね、がどの道みちに連絡れんらくしているのだから決定的な判断はできないのだった。

深夜に隣人を叩たたき起して怯えきった女を返すのもやり

にくいことであり、さりとて夜が明けて女を返して一夜泊めたということがいかなる誤解を生みだすか、相手が気違いのことだから想像すらもつかなかった。ままよ、伊沢の心には奇妙な勇気が湧いてきた。その実体は生活上の感情喪失そうしつに対する好奇心と刺戟しげきとの魅力みりよくに惹ひかれただけのものであったが、どうにでもなるがいい、ともかくこの現実を一つの試鍊しれんと見ることが俺おれの生き方に必要なだけだ。白痴の女の一夜を保護するという眼前の義務以外に何を考え何を怖おそれる必要もないのだと自分自身に言いきかした。彼はこの唐突とうとつ千万な出来事に変に感動し

ていることを羞はずべきことではないのだと自分自身に言いきかせていた。

二つの寢床ねどこをしき女をねせて電燈を消して一二分もしたかと思うと、女は急に起き上り寢床を脱ぬけでて、部屋のどこか片隅かたすみにうずくまっているらしい。それがもし真冬でなければ伊沢は強しいてこだわらず眠ねむったかも知れなかったが、特別寒い夜更よふけで、一人分の寢床を二人に分割したただけでも外気がじかに肌はだにせまり身体の顫ふるえがとまらぬぐらい冷めたかった。起き上って電燈をつけると、女は戸口のところに襟えりをかき合せてうずくまっております、

まるで逃げ場を失って追いつめられた眼の色をしてい
る。どうしたの、ねむりなさい、と言えば呆気ないほど
すぐうなず頷いて再び寢床にもぐりこんだが、電気を消して
一二分もすると、また、同じように起きてしまう。それ
を寢床へつれもどして心配することはない、私はあなた
の身体に手をふれるようなことはしないからと言いきか
せると、女は怯えた眼附めつきをして何か言訳いいわけじみたことを口
の中でブツブツ言っているのであった。そのまま三たび
目の電気を消すと、今度は女はすぐ起き上り、押入の戸
をあけて中へ這入って内側から戸をしめた。

この執拗しつようなやり方に伊沢は腹を立てた。手荒てあらく押入を
 開け放してあなたは何を勘違かんちがいをしてい
 るのですか、あ
 れほど説明もしているのに押入へ這入って戸をしめるな
 どとは人を侮辱ぶじよくするも甚はなはだしい、それほど信用できない
 家へなぜ逃げこんできたのですか、それは人を愚弄ぐろうし、
 私の人格に不当な恥はじを与え、まるであなたが何か被害者ひがいしや
 のようではありませんか、茶番もいい加減にしたまえ。
 けれどもその言葉の意味もこの女には理解する能力すら
 もないのだと思うと、これくらい張合はりあいのない馬鹿馬鹿し
 さも無いもので女の横ツ面なぐを殴りつけてさっさと眠る方

が何より気がきいていると思うのだった。すると女は妙に割切れぬ顔附をして何か口の中でブツブツ言っている、私は帰りたいたい、私は来なければよかった、という意味の言葉であるらしい。でも私はもう帰るところがなく なったから、と言うので、その言葉には伊沢もさすがに胸をつかれて、だから、安心してここで一夜を明かしたらいいでしよう、私が悪意をもたないのにまるで被害者のような思いあがったことをするから腹を立てただけのことです、押入の中などにはいらずに蒲団の中でおやすみなさい。すると女は伊沢を見つめて何か早口にブツブ

ツ言う。え？　なんですか、そして伊沢は飛び上るほど驚おどいた。なぜなら女のブツブツの中から私はあなたに嫌きらわれていきますもの、という一言がハッキリききとれたからである。え、なんですって？　伊沢が思わず目を見開いて訊きき返すと、女の顔は悄しやうぜん然として、私はこなければよかった、私はきらわれている、私はそうは思っていないなかつた、という意味の事をくどくどと言ひ、そしてあらぬ一ヶ所を見つめて放心してしまった。

伊沢ははじめて了りようかい解した。

女は彼を怖れているのではなかつたのだ。まるで事態

はあべこべだ。女は叱られて逃げ場に窮きゆうしてそれだけの理由によつて来たのではない。伊沢の愛情を目算に入れていたのであつた。だがいつたい女が伊沢の愛情を信じる事が起り得るような何事があつたであらうか。豚小屋のあたりや路地や路上でヤアと云つて四五へん挨拶したぐらい、思えばすべてが唐突で全く茶番に外ならず、伊沢の前に白痴の意志や感受性や、ともかく人間以外のものが強要されているだけだつた。電燈を消して一二分たち男の手が女の中からだに触ふれないために嫌われた自覚をいだいて、その羞はずかしさに蒲団をぬけだすということ

が、白痴の場合はそれが真実悲痛なことであるのか、伊沢がそれを信じていいのか、これもハッキリは分らない。ついには押入へ閉じこもる。それが白痴の耻辱ちじよくと自卑じひの表現と解していいのか、それを判断する為の言葉すらもないのだから、事態はともかく彼が白痴と同格に成り下る以外に法がない。なまじいに人間らしい分別が、なぜ必要であろうか。白痴の心の素直さを彼自身もまたもつことが人間の恥辱であろうか。俺にもこの白痴のような心、幼い、そして素直な心が何より必要だったのだ。俺はそれをどこかへ忘れ、ただあくせくした人間共の思考

の中でうすぎたなく汚よごれ、虚妄きよもうの影を追い、ひどく疲れ
ていただけだ。

彼は女を寢床へねせて、その枕元まくらもとに坐すわり、自分の子
供、三ツか四ツの小さな娘をねむらせるように額の髪かみの
毛をなでてやると、女はボンヤリ眼をあけて、それがま
ったく幼い子供の無心さと変るところがないのであつ
た。私はあなたを嫌っているのではない、人間の愛情の
表現は決して肉体だけのものではなく、人間の最後の住
みかはふるさとで、あなたはいわば常にそのふるさとの
住人のようなものなのだから、などと伊沢も始めは妙に

しかつめらしくそんなことも言いかけてみたが、もとよりそれが通じるわけではないのだし、いったい言葉が何物であろうか、何ほどの値打があるのだろうか、人間の愛情すらもそれだけが真実のものだという何のあかしもあり得ない、生の情熱を託たくするに足る真実なものが果してどこに有り得るのか、すべては虚妄の影だけだ。女の髪の毛をなでていると、慟どうこく哭くしたい思いがこみあげ、さだまる影すらもないこの捉とらえがたい小さな愛情が自分の一生の宿命であるような、その宿命の髪の毛を無心になでているような切ない思いになるのであった。

この戦争はいつたいどうなるのであるろう。日本は負け米軍は本土に上陸して日本人の大半は死滅しめつしてしまうのかも知れない。それはもう一つの超ちよう自然の運命、いわば天命のようにしか思われなかった。彼にはしかしもつと卑小な問題があつた。それは驚くほど卑小な問題で、しかも眼の先に差迫さしせまり、常にちらついて放れなかった。それは彼が会社から貰う二百円ほどの給料で、その給料をいつまで貰うことができるか、明日にもクビになり路頭に迷いはしないかという不安であつた。彼は月給を貰う時、同時にクビの宣告を受けはしないかとビクビクし、

月給袋を受取ると一月延びた命のために呆れるぐらい幸福感を味あじわうのだが、その卑小さを顧かえりみていつも泣きたくなるのであった。彼は芸術を夢ゆめみていた。その芸術の前ではただ一粒つぶの塵埃じんあいでしかないような二百円の給料がどうして骨身こつみにからみつき、生存の根底をゆさぶるような大きな苦悶くもんになるのであるか。生活の外形のみのことではなくその精神も魂も二百円に限定され、その卑小さを凝視ぎょうしして気も違わずに平然としていることがなおさらなさけなくなるばかりであった。怒濤どとうの時代に美が何物ものだ。芸術は無力だ！ という部長の馬鹿馬鹿しい大

声が、伊沢の胸にまるで違った真実をこめ鋭い^{するど}そして
巨大な力^{きよだい}で食いこんでくる。ああ日本は敗ける^ま。泥人形
のくずれるように同胞^{どうほう}たちがバタバタ倒れ^{たお}、吹きあげる
コンクリートや煉瓦^{れんが}の屑^{くず}と一緒に^{いっしょ}くたに無数の脚^{あし}だの首^{あし}だ
の腕^{うで}だのが舞^まいあがり、木も建物も何もない平^{たい}な墓^{いら}地
になっ^まてしま^まう。どこへ逃^にげ、どの穴^{あな}へ追^おいつめられ、
どこで穴^{あな}もろとも吹^ふきとばされてしま^まうのだから、夢^{ゆめ}のよ
うな、けれどもそれはもし生き残^まることができたら、そ
の新鮮^{しんせん}な再生^{せいせい}のために、そして全然^{ぜんぜん}予測^{よそ}のつかない新^{しん}世^{せい}
界^{かい}、石屑^{いし}だらけの野原^のの上^のの生活^{せいかつ}のために、伊沢^いはむし

る好奇心がうずくのだった。それは半年か一年さきの当然訪れる運命だったが、その訪れの当然さにもかかわらず、夢の中の世界のような遥かな戯れはる たわむにしか意識されていなかった。眼のさきのすべてをふさぎ、生きる希望を根こそぎさらい去るたった二百円の決定的な力、夢の中にまで二百円に首をしめられ、うなされ、まだ二十七の青春のあらゆる情熱が漂ひょうはく白されて、現実すでに暗黒の曠野こうやの上を茫々ぼうぼうと歩くだけではないか。

伊沢は女が欲しかった。女が欲しいという声は伊沢の最大の希望ですらあったのに、その女との生活が二百円

に限定され、鍋なべだの釜かまだの味噌みそだの米だのみんな二百円じゆもんの呪文呪文を負い、二百円の呪文呪文に憑つかれた子供おにが生まれ、女がまるで手先のように呪文呪文に憑つかれた鬼おにと化して日々ブツブツ呟つぶやいている。胸の灯も芸術も希望の光もみんな消えて、生活自体が道ばたの馬糞ばふんのようにグチャグチャふに踏ふみしだかれて、乾かわきあがって風に吹かれて飛びちりあとかた跡形あとかたもなくなっていく。爪つめの跡すら、なくなっていく。女の背にはそういう呪文呪文が絡からみついていたのであった。やりきれない卑小な生活だった。彼自身にはこの現実の卑小さを裁く力すらもない。ああ戦争、この偉い大だいなる

破壊^{はかい}、奇妙^{きてれつ}奇天烈な公平さでみんな裁かれ日本中が石屑だらけの野原になり泥人形がバタバタ倒れ、それは虚無のなんという切ない巨大な愛情だろうか。破壊の神の腕の中で彼は眠りこけたくなり、そして彼は警報がなるとむしろ生き生きしてゲートルをまくのであった。生命の不安と遊ぶことだけが毎日の生きが이었다。警報が解除になるとガツカリして、絶望的な感情の喪失がまたはじまるのであった。

この白痴の女は米を炊くことも味噌汁^{みそしる}をつくることも知らない。配給の行列に立っているのが精一杯^{せいいつぱい}で、喋^{しゃべ}

ることすらも自由ではないのだ。まるで最も薄^{うす}い一枚のガラスのように喜怒哀楽^{きどあいらく}の微風^{びふう}にすら反響^{はんきよう}し、放心^{おび}と怯^{おび}えの皺^{しわ}の間へ人の意志を受け入れ通過させているだけだ。二百円の悪霊^{あくりよう}すらも、この魂には宿ることができないのだ。この女はまるで俺のために造られた悲しい人形^{かたまり}のようではないか。伊沢はこの女と抱^だき合い、暗い曠野^{ひょうひよう}を飄々^{ひょうひょう}と風に吹かれて歩いている、無限の旅路を目^めに描^{えが}いた。

それにもかかわらず、その想念が何か突飛に感じられ、途方もない馬鹿げたことのように思われるのは、そこに

もまた卑小きわまる人間の殻からが心の芯しんをむしばんでいる
せいなのだろう。そしてそれを知りながら、しかもなお、
わきでるようなこの想念と愛情の素直さが全然虚妄のも
のにしか感じられないのはなぜだろう。白痴の女よりも
あのアパートの淫売婦が、そしてどこかの貴婦人がより
人間的だという何か本質的な掟おきてが在るのだろうか。け
れどもまるでその掟が厳として存在している馬鹿馬鹿し
い有様なのであった。

俺は何を怖れているのだろうか。まるであの二百円の
悪霊が——俺は今この女によってその悪霊と絶縁ぜつえんしよう

とじているのに、そのくせやはり悪霊の咒文によって縛しばりつけられているではないか。怖れているのはただ世間の見栄みえだけだ。その世間とはアパートの淫売婦あひるだの妾だの妊娠した挺身隊だの家鴨あひるのような鼻にかかった声をだして喚わめいているオカミサン達の行列会議だけのことだ。そのほかに世間などはどこにもありはしないのに、そのくせこの分りきった事実を俺は全然信じていない。不思議な掟おきてに怯えているのだ。

それは驚くほど短い（同時にそれは無限に長い）一夜であった。長い夜のまるで無限の続きだと思っていたの

に、いつかしら夜が白み、夜明けの寒気が彼の全身を感
覚のない石のようにかたまらせていた。彼は女の枕元で、
ただ髪の毛をなでつづけていたのであった。



その日から別な生活がはじまった。

けれどもそれは一つの家に女の肉体がふえたというこ
との外には別でもなければ変ってすらもいなかった。そ
れはまるで嘘うそのような空々しさで、たしかに彼の身边に、

そして彼の精神に、新たな芽生えの唯一本の穂先ほさきすら見出すことができないのだ。その出来事の異常さをともかく理性的に納得しているというだけで、生活自体に机の置き場所が変わったほどの変化も起きてはいなかった。彼は毎朝出勤し、その留守宅の押入の中に一人の白痴が残されて彼の帰りを待っている。しかも彼は一足でると、もう白痴の女のことなどは忘れており、何かそういう出来事がもう記憶きおくにも定かではない十年二十年前に行われていたかのような遠い気持がするだけだった。

戦争という奴やつが、不思議に健全な健忘性なのであった。

まったく戦争の驚くべき破壊力や空間の変転性という奴
はたった一日が何百年の変化を起し、一週間前の出来事
が数年前の出来事に思われ、一年前の出来事などは、記
憶の最もどん底の下積の底へ隔へだてられていた。伊沢の近
くの道路だの工場の四囲の建物などが取りこわれ町全
体がただ舞まいあがる埃ほこりのような疎開騒そかいさわぎをやらかした
のもつい先頃さきごろのことであり、その跡すらも片づいていな
いのに、それはもう一年前の騒ぎのように遠ざかり、街
の様相を一変する大きな変化が二度目にそれを眺ながめる時
にはただ当然な風景でしかなかった。その健康な

健忘性の雑多なカケラの一つの中に白痴の女がやっぱり霞かすんでいる。昨日きのうまで行列していた駅前駅前の居酒屋の疎開跡の棒切れだの爆弾ばくだんに破壊されたビルの穴だの街の焼跡だの、それらの雑多のカケラの間にはさまれて白痴の顔がころがっているだけだった。

けれども毎日警戒警報けいけいけいがなる。時には空襲くうしゅう警報けいけいもなる。すると彼は非常に不愉快ふゆかいな精神状態になるのであった。それは彼の留守宅の近いところに空襲があり知らない変化が現に起っていないかという懸念けねんであったが、その懸念の唯一の理由はただ女がとりみだして、とびだし

てすべてが近隣きんりんへ知れ渡わたっていかないかという不安なのだ
 った。知らない変化の不安のために、彼は毎日明るいう
 ちに家へ帰ることができなかつた。この低俗な不安を
 克服こくふくし得ぬ惨みじめさに幾いくたび虚むなしく反はん抗こうしたか、彼はせめ
 て仕立屋すべに全すべてを打うち開あけてしまいたいと思うのだった
 が、その卑劣ひれつさに絶望して、なぜならそれは被害の最も
 軽少な告白を行うことによつて不安をまぎらす惨めな手
 段にすぎないので、彼は自分の本質が低俗な世間なみに
 すぎないことを咒のろい憤いきどおるのみだった。

彼には忘れ得ぬ二つの白痴の顔があつた。街角を曲る

時だの、会社の階段を登る時だの、電車の人ごみを脱^ぬける時だの、はからざる随所^{ずいしよ}に二つの顔をふと思いだし、そのたびに彼の一切の思念が凍^{こお}り、そして一瞬^{いっしゆん}の逆上^{さか}が絶望的に凍りついているのであった。

その顔の一つは彼が始めて白痴の肉体にふれた時の白痴の顔だ。そしてその出来事自体はその翌日には一年昔の記憶の彼方^{かなた}へ遠ざけられているのであったが、ただ顔だけが切り放されて思いだされてくるのである。

その日から白痴の女はただ待ちもうけている肉体であるにすぎずその外の何の生活も、ただひとときれの考えす

らもないのであった。常にただ待ちもうけていた。伊沢の手が女の肉体の一部にふれるというだけで、女の意識する全部のことは肉体の行為こういであり、そして身体からだも、そして顔も、ただ待ちもうけているのみであった。驚くべきことに、深夜、伊沢の手が女にふれるというだけで、眠り痴しれた肉体が同一の反応を起し、肉体のみは常に生き、ただ待ちもうけているのである。眠りながらも！ けれども、目覚めている女の頭に何事が考えられているかと云えば、元々ただの空虚であり、在るものはない。ただ魂こんすいの昏睡と、そして生きている肉体のみではないか。

目覚めた時も魂はねむり、ねむった時もその肉体は目覚めていゝる。在るものはただ無自覚な肉慾のみ。それはあらゆる時間に目覚め、虫のごとき倦^うまざる反応の蠢動^{しゅんどう}を起す肉体であるにすぎない。

も一つの顔、それは折から伊沢の休みの日であつたが、白昼遠からぬ地区に二時間にわたる爆撃があり、防空壕をもたない伊沢は女と共に押入にもぐり蒲団を楯^{たて}にかくれていた。爆撃は伊沢の家から四五百^{メートル}米離れた地区へ集中したが、地軸^{ちじく}もろとも家はゆれ、爆撃の音と同時に呼吸も思念も中絶する。同じように落ちてくる爆弾でも

烧夷弾しょういだんと爆弾では凄みにすごおいて青大将と蝮まむしぐらいの相違があり、烧夷弾にはガラガラという特別不気味な音おんきょう響ひびが仕掛けてあっても地上の爆発音がないのだから音は頭上でスウと消え失せ、竜頭蛇尾りゅうとうだびとはこのことで、蛇尾どころか全然尻尾しっぽがなくなるのだから、決定的な恐怖感きょうふに欠けている。けれども爆弾という奴は、落下音こそ小さく低いが、ザアという雨降りの音のようなただ一本の棒ひきさをひき、こいつが最後に地軸もろとも引裂くような爆発音じゆうじつを起すのだから、ただ一本の棒にこもった充じゆうじつ実した凄味せいみといったら論外で、ズドズドズドと爆発の足が近づ

く時の絶望的な恐怖ときては額面通りに生きた心持がな
いのである。おまけに飛行機の高度が高いので、ブンブ
ンという頭上通過の米機の音も至極かすかに何食わぬ風
に響ひびいていて、それはまるでよそ見をしている怪物かいぶつに大
きな斧おので殴なぐりつけられるようなものだ。攻撃する相手の
様子が不確かだから爆音の唸うなりの変な遠さが、甚だ不安
であるところへ、そこからザアと雨降りの棒一本の落下
音がのびてくる。爆発を待つまの恐怖、全くこいつは言
葉も呼吸も思念もとまる。いよいよ今度はお陀仏だぶつだとい
う絶望が発はっ狂寸前きやうすんぜんの冷たさで生きて光っているだけだ。

伊沢の小屋は幸い四方がアパートだの気違いだの仕立屋などの二階屋でとりかこまれていたので、近隣の家は窓ガラスがわれ屋根の傷んだ家もあったが、彼の小屋のみガラスに罅ひびすらもはいらなかった。ただ豚小屋の前の畑に血だらけの防空頭巾ずきんが落ちてきたばかりであった。押入の中で、伊沢の目だけが光っていた。彼は見た。白痴の顔を。虚空こくうをつかむその絶望の苦悶を。

ああ人間には理智りちがある。いかなる時にもなおいくらかの抑制よくせいや抵抗ていこうは影をとどめているものだ。その影ほどの理智も抑制も抵抗もないということが、これほどあさ

ましいものだとは！ 女の顔と全身にただ死の窓へひらかれた恐怖と苦悶が凝りついていた。苦悶は動き苦悶はもがき、そして苦悶が一滴の涙を落している。もし犬の眼が涙を流すなら犬が笑うと同様に醜怪きわまるものである。影すらも理智のない涙とは、これほど醜悪なものだとは！ 爆撃のさ中において四五歳ないし六七歳の幼児達は奇妙に泣かないものである。彼等の心臓は波のような動悸をうち、彼等の言葉は失われ、異様な目を大きく見開いているだけだ。全身に生きているのは目だけであるが、それは一見したところ、ただ大きく見

開かれていますだけで、必ずしも不安や恐怖というものの直接劇的な表情を刻んでいるというほどではない。むしろ本来の子供よりもかえって理智的に思われるほど情意を静かに殺している。その瞬間にはあらゆる大人もそれだけで、あるいはむしろそれ以下で、なぜならむしろ露骨ろこつな不安や死への苦悶を表わすからで、いわば子供が大人よりも理智的にすら見えるのだった。

白痴の苦悶は、子供達の大きな目とは似ても似つかぬものであった。それはただ本能的な死への恐怖と死への苦悶があるだけで、それは人間のものではなく、虫のも

のですらもなく、醜悪な一つの動きがあるのみだった。やや似たものがあるとすれば、一寸五分ほどの芋虫いもむしが五尺の長さにくれあがってもがいている動きぐらいのものであろう。そして目に一滴の涙をこぼしているのである。

言葉も叫さけびも呻うめきもなく、表情もなかった。伊沢の存在すらも意識してはいなかった。人間ならばかほどの孤独こどくが有り得る筈はない。男と女とただ二人押入にいて、その一方の存在を忘れ果てるということが、人の場合に有り得べきはずはない。人は絶対の孤独というが他の存在を自覚してのみ絶対の孤独も有り得るので、かほどま

で盲目的な、無自覚な、絶対の孤独が有り得ようか。そ

もうもくてき

れは芋虫の孤独であり、その絶対の孤独の相のあさましさ。心の影の片鱗へんりんもない苦悶の相の見るに堪たえぬ醜悪さ。

爆撃が終った。伊沢は女を抱き起したが、伊沢の指の一本が胸にふれても反応を起す女が、その肉慾すら失っていた。このむくろを抱いて無限に落下しつづけている、暗い、暗い、無限の落下があるだけだった。

彼はその日爆撃直後に散歩にでて、なぎ倒された民家の間で吹きとばされた女の脚も、腸のとびだした女の腹も、ねじきれた女の首も見たのであった。

三月十日の大空襲の焼跡もまだ吹きあげる煙けむりをくぐって伊沢は当あてもなく歩いていた。人間が焼鳥やきとりと同じようにあっちこっちに死んでいる。ひとかたまりに死んでいる。まったく焼鳥と同じことだ。怖こわくもなければ、汚きたなくもない。犬と並んで同じように焼かれている死体もあるが、それは全く犬死で、しかしそこにはその犬死の悲痛かんがいさも感慨すらも有りはしない。人間が犬のごとくに死んでいるのではなく、犬と、そして、それと同じような何物かが、ちようど一皿の焼鳥のように盛もられ並べられているだけだった。犬でもなく、もとより人間ですらも

ない。

白痴の女が焼け死んだら——土から作られた人形が土にかえるだけではないか。もしこの街に焼夷弾のふりそそぐ夜がきたら……伊沢はそれを考えると、変に落着いて沈^{しず}み考えている自分の姿と自分の顔、自分の目を意識せず^{しず}にいられなかった。俺は落着いている。そして、空襲を待っている。よかろう。彼はせせら笑うのだった。俺はただ醜悪なものが嫌いなだけだ。そして、元々魂のない肉体が焼けて死ぬだけのことではないか。俺は女を殺しはしない。俺は卑劣で、低俗な男だ。俺にはそれだ

けの度胸はない。だが、戦争がたぶん女を殺すだろう。その戦争の冷酷な手れいこくを女の頭上へ向けるためのちよつとした手掛りてがかだけをつかめばいいのだ。俺は知らない。多分、何かある瞬間が、それを自然に解決しているにすぎないだろう。そして伊沢は空襲をきわめて冷静に待ち構えていた。



それは四月十五日であった。

その二日前、十三日に、東京では二度目の夜間大空襲があり、池袋いけぶくろだの巣鴨すがもだの山手方面やまのてに被害があつたが、たまたまその罹災証明りさいが手にはいだったので、伊沢は埼玉へ買出しにでかけ、いくらかの米をリュックに背負つて帰つて来た。彼が家へ着くと同時に警戒警報が鳴りだした。

次の東京の空襲がこの街のあたりだろうということとは焼け残りの地域を考えれば誰だれにも想像のつくことで、早ければ明日、遅くとも一ヶ月とはかからないこの街の運命の日が近づいている。早ければ明日と考えたのは、こ

れまでの空襲の速度、編隊夜間爆撃の準備期間の間隔が早くて明日ぐらいであったからで、この日がその日になろうとは伊沢は予想していなかった。それ故買出しにも出掛けたので、買出しと云っても目的は他にもあり、この農家は伊沢の学生時代に縁故えんこのあった家であり、彼は二つのトランクとリュックにつめた物品を預けることがむしろ主要な目的であった。

伊沢は疲れつかきつっていた。旅装は防空服装でもあったから、リュックを枕まくらにそのまま部屋のまんなかひっくりかえって、彼は実際この差しせまった時間にうとうと

とねむってしまった。ふと目がさめると諸方のラジオは
がながんがなりたてており、編隊の先頭はもう伊豆南端
にせまり、伊豆南端を通過した。同時に空襲警報がなり
だした。いよいよこの街の最後の日だ、伊沢は直覚した。
白痴を押入の中に入れ、伊沢はタオルをぶらさげ歯ブラ
シをくわえて井戸端へでかけたが、伊沢はその数日前に
ライオン煉歯磨ねりはみがきを手に入れ長い間忘れていた煉歯磨の口
中にしみわたる爽快そうかいさをなつかしんでいたので、運命の
日を直覚するとどういうわけだか歯をみがき顔を洗う気
になっただが、第一にその煉歯磨が当然あるべき場所から

ほんのちよつと動いていただけで長い時間（それは実に長い時間に思われた）見当らず、ようやくそれを見附けると今度は石鹼（この石鹼も芳香のある昔の化粧石鹼）がこれもちよつと場所が動いていただけで長い時間見当らず、ああ俺は慌てているな、落着け、落着け、頭を戸棚にぶついたり机につまずいたり、そのために彼は暫時の間一切の動きと思念を中絶させて精神統一をはかろうとするが、身体自体が本能的に慌てだして滑り動いて行くのである。ようやく石鹼を見つけたして井戸端へ出ると仕立屋夫婦が畑の隅の防空壕へ荷物を投げこんでおり、

家鴨あひるによく似た屋根裏の娘が荷物をブラさげてうろろうろしていた。伊沢はともかく煉齒磨と石齧を断念せず突きとめた執拗しつようさを祝福し、果してこの夜の運命はどうなるのだろうかと思つた。まだ顔をふき終らぬうちに高射砲こうしゃほうがなりはじめ、頭をあげると、もう頭上に十何本の照空燈が入りみだれて真上をさして騒さわいでおり、光芒こうぼうのまんなかに米機がぼっかり浮ういている。つづいて一機、また一機、ふと目を下方へおろしたら、もう駅前の方角が火の海になっていた。

いよいよ来た。事態がハッキリすると伊沢はようやく

落着いた。防空頭巾をかぶり、蒲団ふとんをかぶって軒先のきさきに立ち二十四機まで伊沢は数えた。ポツカリ光芒のまんなか
に浮いて、みんな頭上を通過している。

高射砲の音だけが気が違ったように鳴りつづけ、爆撃の音は一向に起らない。二十五機を数える時から例のガラガラとガードの上を貨物列車が駆け去る時のような焼夷弾の落下音が鳴り始めたが、伊沢の頭上を通り越こして、後方の工場地帯へ集中されているらしい。軒先からは見えないので豚小屋の前まで行って後を見ると、工場地帯は火の海で、呆あきれたことには今まで頭上を通過していた

飛行機と正反対の方向からも次々と米機が来て後方一帯に爆撃を加えているのだ。するともうラジオはとまり、空一面は赤々と厚い煙の幕にかくれて、米機の姿も照空燈の光芒も全く視界から失われてしまった。北方の一角を残して四周は火の海となり、その火の海が次第に近づいていった。

仕立屋夫婦は用心深い人達で、常から防空壕を荷物用に造ってあり目張りの泥どろも用意しておき、万事手順通りに防空壕に荷物をつめこみ目張りをぬり、そのまた上へ畑の土もかけ終っていた。この火じゃとても駄目だめですね。

仕立屋は昔の火消しの装束しょうぞくで腕組みをして火の手を眺ながめていた。消せつたつて、これじゃ無理だ。あたしやもう逃げますよ。煙にまかれて死んでみても始まらねえや、仕立屋はリヤカーに一山の荷物をつみこんでおり、先生、いっしょに引上げましょう。伊沢はそのとき、騒々そうぞうしいほど複雑な恐怖感に襲おそわれた。彼の身体は仕立屋と一緒いっしょに滑すべりかけているのであったが、身体の動きをふりきるような一つの心の抵抗で滑りを止めると、心の中の一角から張りさけるような悲鳴の声と同時に起ったような気がした。この一瞬の遅延ちえんのために焼けて死ぬ、彼はほと

んど恐怖のために放心したが、再びともかく自然によるめきだすような身体の滑りをこらえていた。

「僕はね、^{ぼく}ともかく、もうちよつと、残りますよ。僕はね、仕事があるのだ。僕はね、ともかく芸人だから、命のとことんの所で自分の姿を見凝^みめ得るような機会には、そのとことんの所で最後の取引をしてみることを要求されているのだ。僕は逃げたいが、逃げられないのだ。この機会を逃^のがすわけに行かないのだ。もうあなた方は逃げて下さい。早く、早く、一瞬間がすべてを手遅れに
してしまおう」

早く、早く。一瞬間がすべてを手遅れに。すべてとは、それは伊沢自身の命のことだ。早く早く、それは仕立屋をせきたてる声ではなくて、彼自身が一瞬も早く逃げたいための声だった。彼がこの場所を逃げだすためには、あたりの人々がみんな立去った後でなければならぬのだ。さもなければ、白痴の姿を見られてしまう。

じゃ先生、お大事に。リヤカーをひっぱりだすと仕立屋も慌あわてていた。リヤカーは路地の角々にぶつかりながら立去った。それがこの路地の住人達の最後に逃げ去る姿であった。岩を洗う怒濤の無限の音のような、屋根を

打つ高射砲の無数の破片の無限の落下の音のような、休
 止と高低の何もないザアザアという無気味な音が無限に
 連続しているのだが、それが府道を流れている避難民達
 の一かたまりの蹙音あしおとなのだ。高射砲の音などはもう間まが
 抜ぬけて、蹙音の流れの中に奇妙な命がこもっていた。高
 低と休止のない奇怪な音の無限の流れを世の何人が蹙音
 と判断し得よう。天地はただ無数の音響でいっぱいだった。
 米機の爆音、高射砲、落下音、爆発の音響、蹙音、
 屋根を打つ弾片、けれども伊沢の身边の何十米メートルかの周
 圍やみだけは赤い天地のまんなかでともかく小さな闇をつく

り、全然ひっそりしているのだった。変てこな静寂せいじやくの厚みと、気の違いのような孤独の厚みがとつぷり四周をつつんでいる。もう三十秒、もう十秒だけ待とう。なぜ、そして誰が命令しているのだから、どうしてもそれに従わねばならないのだから、伊沢は気違いになりそうだった。突然、もだえ、泣き喚わめいて盲目的に走りだしそうだった。そのとき鼓膜こまくの中を掻かき廻まわすような落下音が頭の真上へ落ちてきた。夢中むちゆうに伏ふせると、頭上で音響は突然消え失せ、嘘うそのような静寂が再び四周に戻っている。やれやれ、脅おどかしやがる。伊沢はゆっくり起き上って、胸や膝ひざ

の土を払はらった。顔をあげると、気違いの家が火を吹いて
いる。何だい、とうとう落ちたのか、彼は奇妙に落着い
ていた。気がつくとき、その左右の家も、すぐ目の前のア
パートも火をふきだしているのだ。伊沢は家の中へとび
こんだ。押入の戸をはねとばして（実際それは外れて飛
んでバタバタと倒れた）白痴の女を抱くように蒲団をか
ぶって走りでた。それから一分間ぐらいのことが全然夢
中で分らなかつた。路地の出口に近づいたとき、また、
音響が頭上めがけて落ちてきた。伏せから起上ると、路
地の出口の煙草屋も火を吹き、向いの家では仏壇ぶつだんの中か

ら火が吹きだしているのが見えた。路地をでて振りかえ
ると、仕立屋も火を吹きはじめ、どうやら伊沢の小屋も
燃えはじめているようだった。

四周は全くの火の海で府道の上には避難民の姿もすく
なく、火の粉がとびかい舞い狂まっているばかり、もう駄
目だと伊沢は思った。十字路へくると、ここから大変な
混雑で、あらゆる人人がただ一方をめざしている。その
方向がいちばん火の手が遠いのだ。そこはもう道ではな
くて、人間と荷物の悲鳴の重りあった流れにすぎず、押
しあいへしあい突き進み踏み越え押し流され、落下音が

頭上にせまると、流れは一時に地上に伏して不思議にびつたり止まってしまい、何人かの男だけが流れの上を踏みつけて駆け去るのだが、流れの大半の人々は荷物と子供と女と老人の連れがあり、呼びかわし立ち止り戻り突き当りはねとばされ、そして火の手はすぐ道の左右にせまっていた。小さな十字路へきた。流れの全部がここでも一方をめざしているのはやはりそつちが火の手が最も遠いからだ、その方向には空地も畑もないことを伊沢は知っており、次の米機の焼夷弾が行く手をふさぐところの道には死の運命があるのみだった。一方の道は既に両^すで

側の家々が燃え狂っているのだが、そこを越すと小川が流れ、小川の流れを数町上ると麦畑へでられることを伊沢は知っていた。その道を駆けぬけて行く一人の影すらもないのだから、伊沢の決意も鈍にぶったが、ふと見ると百五十米ぐらい先の方で猛火もうかに水をかけているたった一人の男の姿が見えるのであった。猛火に水をかけるといつでも決して勇しい姿ではなく、ただバケツをぶらさげているだけで、たまに水をかけてみたり、ぼんやり立ったり歩いてみたり変に痴鈍ちどんな動きで、その男の心理の解釈に苦しむような間の抜けた姿なのだった。ともかく一人

の人間が焼け死にもせず立っていられるのだからと、伊沢は思った。俺の運をためすのだ。運。まさに、もう残されたのは、一つの運、それを選ぶ決断があるだけだった。十字路に溝があった。伊沢は溝に蒲団をひたした。

伊沢は女と肩かたを組み、蒲団をかぶり、群集の流れに訣別けつべつした。猛火の舞い狂う道に向って一足歩きかけると、女は本能的に立ち止り群集の流れの方へひき戻されるようにフラフラとよろめいて行く。「馬鹿！」女の手を力一杯握にぎってひっぱり、道の上へよろめいて出る女の肩をだきすくめて、「そっちへ行けば死ぬだけなのだ」女の身

体を自分の胸にだきしめて、ささやいた。

「死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。怖れるな。そして、俺から離れるな。火も爆弾も忘れて、おい俺達二人の一生の道はな、いつもこの道なのだよ。この道をただまっすぐ見つめて、俺の肩にすがりついてくるがいい。分ったね」女はごくんと頷いた。

その頷きは稚拙であつたが、伊沢は感動のために狂いそうになるのであつた。ああ、長い長い幾たびかの恐怖の時間、夜昼の爆撃の下において、女が表した始めての意志であり、ただ一度の答えであつた。そのいじらしさ

に伊沢は逆上しそうであつた。今こそ人間を抱きしめており、その抱きしめている人間に、無限の誇りほこをもつのであつた。二人は猛火をくぐつて走つた。熱風のかたまりの下をぬけでると、道の両側はまだ燃えている火の海だつたが、すでに棟むねは焼け落ちたあとで火勢は衰おとろえ熱気は少くなつていた。そこにも溝があふれていた。女の足から肩の上まで水を浴あびせ、もう一度蒲団を水に浸ひたしてかぶり直した。道の上に焼けた荷物や蒲団が飛び散り、人間が二人死んでいた。四十ぐらいの女と男のようだった。

二人は再び肩を組み、火の海を走った。二人はようやく小川のふちへでた。ところがここは小川の両側の工場が猛火を吹きあげて燃え狂っており、進むことも退くことも立止ることも出来なくなつたが、ふと見ると小川に梯子はしごがかけられているので、蒲団をかぶせて女を下し、伊沢は一気に飛び降りた。訣別した人間達が三々五々川の中を歩いている。女は時々自発的に身体を水に浸している。犬ですらそうせざるを得ぬ状じょうきよう 況じょうきようだつたが、一人の新たな可愛い女が生れでた新鮮さに伊沢は目をみひらいて水を浴びる女の姿態をむさぼり見た。小川は炎ほのおの

下を出外れて暗闇くらやみの下を流れはじめた。空一面の火の色で真の暗闇は有り得なかつたが、再び生きて見ることを得た暗闇に、伊沢はむしろ得えたい体の知れない大きな疲れと、涯はてしれぬ虚無とのためにただ放心がひろがる様を見るのみだった。その底に小さな安堵あんどがあるのだが、それは変にケチくさい、馬鹿げたものに思われた。何もかも馬鹿馬鹿しくなっていた。川をあがると、麦畑があつた。麦畑は三方丘おかにかこまれて、三町四方ぐらゐの広さがあり、そのまんなかを国道が丘を切りひらいて通っている。丘の上の住宅は燃えており、麦畑のふちの銭湯と工場と寺

院と何かが燃えており、そのおのおのの火の色が白、赤、
橙^{だいたい}、青、濃淡^{のうたん}とりどりみんな違っているのである。に
わかにかが風が吹きだしてごうごうと空気が鳴り、霧^{きり}のよう
なこまかい水滴が一面にふりかかってきた。

群集はなお蜿蜒^{えんえん}と国道を流れていた。麦畑に休んでい
るのは数百人で、蜿蜒たる国道の群集にくらべれば物の
数ではないのであった。麦畑のつづきに雑木林^{ぞうきばやし}の丘があ
った。その丘の林の中にはほとんど人がいかなかった。二
人は木立^{こだち}の下へ蒲団をしいてねころんだ。丘の下の畑の
ふちに一軒の農家が燃えており、水をかけている数人の

人の姿が見える。その裏手に井戸があつて一人の男がポンプをガチャガチャやり水を飲んでいたのである。それを目がけて畑の四方からたちまち二十人ぐらいの老幼男女が駆け集つてきた。彼等はポンプをガチャガチャやり、代る代る水を飲んでいたのである。それから燃え落ちようとする家の火に手をかざして、ぐるりと並んで煖だんをとり、崩れ落ちる火のかたまりに飛びのいたり、煙に顔をそむけたり、話をしたりしている。誰も消火に手伝う者はいなかった。

ねむくなつたと女が言い、私疲れたのとか、足が痛い

のとか、目も痛いのかの眩くらきのうち三つに一つぐら
いは私ねむりたいの、と言った。ねむるがいいさ、と伊
沢は女を蒲団にくるんでやり、煙草に火をつけた。何本
目かの煙草を吸っているうちに、遠く彼方に解除の警報
がなり、数人の巡査じゆんさが麦畑の中を歩いて解除を知らせて
いた。彼等の声は一樣につぶれ、人間の声のようではな
かった。蒲田かまた署管内の者は矢口国民学校が焼け残ったか
ら集れ、とふれている。人々が畑うねの畝から起き上り、国
道へ下りた。国道は再び人の波だった。しかし、伊沢は
動かなかった。彼の前にも巡査がきた。

「その人は何かね。怪我けがをしたのかね」

「いいえ、疲れて、ねているのです」

「矢口国民学校を知っているかね」

「ええ、一休みして、あとから行きます」

「勇気をだしたまえ。これしきのことには」

巡査の声はもう続かなかった。巡査の姿は消え去り、雑木林の中にはとうとう二人の人間だけが残された。二人の人間だけが——けれども女はやはりただ一つの肉塊にくかいにすぎないではないか。女はぐっすりねむっていた。すべての人々が今焼跡やけあとの煙の中を歩いている。すべての

人々が家を失い、そして皆みな歩いている。眠りのことを考えてすらいないであろう。今眠ることができるのは、死んだ人間とこの女だけだ。死んだ人間は再び目覚めることがないが、この女はやがて目覚め、そして目覚めることによつて眠りこけた肉塊に何物を付け加えることも有り得ないのだ。女は微かすかであるが今まで聞き覚えのないいびき鼾声をたてていた。それは豚の鳴声に似ていた。まったくこの女自体が豚そのものだと伊沢は思った。そして彼は子供の頃の小さな記憶きおくの断片をふと思いだしていった。一人の餓鬼がき大将の命令で十何人かの子供たちが仔豚こぶた

を追いまわしていた。追いつめて、餓鬼大将はジャツクナイフでいくらかの豚の尻肉しりにくを切りとった。豚は痛そう
な顔もせず、特別の鳴声もたてなかった。尻の肉を切り
とられたことも知らないように、ただ逃げまわっている
だけだった。伊沢は米軍が上陸して重砲弾が八方に唸うなり
コンクリートのビルが吹きとび、頭上に米機が急降下し
て機銃掃射そうしやを加える下で、土煙りと崩れたビルと穴の間
を転げまわって逃げ歩いている自分と女のことを考えて
いた。崩れたコンクリートの蔭かげで、女が一人の男に押え
つけられ、男は女をねじ倒して、肉体の行為ふけに耽りなが

ら、男は女の尻の肉をむしりとって食べている。女の尻の肉はだんだん少くなるが、女は肉慾のことを考えているだけだった。

明方あけがたに近づくと冷えはじめて、伊沢は冬の外套がいとうもきていたし厚いジャケットもきているのだが、寒気が堪たえがたかった。下の麦畑のふちの諸方にはなお燃えつつづけている一面の火の原があった。そこまで行って暖をとりたいたと思ったが、女が目を覚すと困るので、伊沢は身動きがでしなかつた。女の目を覚すのがなぜか堪えられぬ思いがしていた。

女の眠りこけているうちに女を置いて立去りたいとも思ったが、それすらも面倒めんどうくさくなっていた。人が物を捨てるには、たとえば紙屑を捨てるにも、捨てるだけの張合はりあいと潔癖けつぺきぐらいはあるだろう。この女を捨てる張合はりあいも潔癖も失われているだけだ。微塵みじんの愛情もなかったし、未練もなかったが、捨てるだけの張合いもなかった。生きるための、明日の希望がないからだった。明日の日に、たとえば女の姿を捨ててみても、どこかの場所に何か希望があるのだろうか。何をたよりに生きるのだろうか。どこに住む家があるのだから、眠る穴ぼこがあるのだから、

それすらも分りはしなかった。米軍が上陸し、天地にあ
らゆる破壊が起り、その戦争の破壊の巨大な愛情が、す
べてを裁いてくれるだろう。考えることもなくなってい
た。

夜が白んできたら、女を起して焼跡の方には見向きも
せず、ともかくねぐらを探して、なるべく遠い停車場を
めざして歩きだすことにしよう。伊沢は考えていた。電
車や汽車は動くだろうか。停車場の周囲の枕木まくらぎの垣根かきねに
もたれて休んでいるとき、今朝は果して空が晴れて、俺
と俺の隣に並んだ豚の背中に太陽の光がそそぐだろうか

と伊沢は考えていた。あまり今朝が寒すぎるからであつた。

(昭和二十一年六月)

日本文学電子図書館

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行



日本文学電子図書館